

はじめに

バレエと聞けば、多くの人はまず、チュチュをまとったバレリーナを思い浮かべるだろう。舞台の中央で軽やかに舞う女性ダンサーと、彼女を支える男性ダンサー。バレエは女性が主役となる芸術——そうしたイメージは、今日ではごく自然なものになっている。

しかし、この「女性中心のバレエ」が生まれたのは、意外にも十九世紀に入ってからのことだ。ロマンティック・バレエの幕開けを告げた《ラ・シルフィード》によって、バレエはそれまでの男性主導の舞台から一転し、女性の身体と幻想性を軸とする芸術へと姿を変えた。このパラダイムシフトこそが、十九世紀のヨーロッパに空前の熱狂を生み——夢、異界、そして「手の届かない女性」のイメージが観客を魅了したのである。

だが、その輝きは永遠には続かなかった。政治体制、経済構造、社会の価値観、芸術の様式、観客の嗜好などが変化する中で、ロマンティック・バレエは次第にその力を失い、やがて衰退へと向かっ

ていった。

本書は、十九世紀の社会風俗やジェンダー観の変化に目を向けながら、パリにおけるロマンティック・バレエの成立から衰退までを読み解こうとするものである。華やかな舞台のきらめきの裏側には、時代の矛盾や人々の欲望が折り重なっている。十九世紀という激動の時代に、バレエは何を映し出したのか——その問いを手がかりに、バレエ史の一章を新たな視点からみつめ直していくことが、本書の大きな出発点となる。

ロマンティック・バレエが誕生したのは、十九世紀前半のパリ・オペラ座（以下、オペラ座）であった。一八三一年に総裁に就任したルイ・デジレ・ヴェロンは革新的な経営手腕によって、オペラ座はロマン主義の幻想性と商業主義の戦略を巧みに融合させた新しいバレエ様式を打ち立てる。ここで確立されたのが、女性ダンサーを中心に据え、観客のまなざしを一身に集めるスターシステムである。スターダンサーは表舞台では革新的な舞台美術と物語性豊かな演出のもとで観客を魅了する存在であった一方、舞台裏ではフォワイエ・ド・ラ・ダンスを介して男性定期会員と結びつき、芸術と社交・商業を一体化した独自の文化を形成していった。

七月革命後に台頭した新エリート層を取り込むため、オペラ座はバレエの在り方を大きく変えた。女性ダンサーを中心に据え、幻想的で理解しやすい物語を上演することで観客を引きつけ、ロマンティック・バレエは瞬く間にヨーロッパ中の熱狂を呼ぶ。しかし、その隆盛は長く続かない。一八四〇年代を境に衰退の兆しがあらわれ、次第にロマンティック・バレエは新鮮さを失っていく。

こうしたロマンティック・バレエの成立と衰退をめぐっては、これまで多くの研究が進められてきた。だが、当時の社会背景やジェンダー観、さらには劇場文化と観客層との相互作用までを総合的に読み解き、女性像と物語構造に焦点を当てて検討する試みは必ずしも充分ではない。

本書は、まずロマンティック・バレエが栄華を極めた背景を、当時の社会・文化思想、科学技術、劇場経営の文脈から明らかにする。そして後半では、スターシステムがもたらした構造的偏りや、物語構造の単純化に注目しながら、なぜロマンティック・バレエが衰退へと向かったのかを検討していく。十九世紀のバレエを支えていた価値観とジェンダーの力学を読み直すことによって、ロマンティック・バレエという様式の歴史的な位置づけを再考すること——それが本書の目的である。

ダンスとその歴史研究は、時代を問わず多次元的な対象があり、それぞれの面が他の面と干渉し合いながら、複数のアプローチがおこなわれている。詳細としては、精神性・テクニク・演出・テーマ・音楽などの美学、上演プログラム・検閲などの劇場をめぐる史実、トレーニングや日常生活・労働条件などのダンサーをとりまく社会背景、そして、バレエの形式や理論とその変遷などがある。

これらを研究する際には、舞踊譜、台本や音楽、上演記録や公的な文章、メモに至るまで、当時書かれた一次資料のほか、重要となってくるのが、バレエを鑑賞した観客や批評家による舞踊評や絵画であり、時代がくざると、写真や映像資料も含まれるようになる。

バレエの歴史がその表象の歴史と混同されているといわざるを得ないのは、映像資料のない時代のバレエを研究対象とする場合、ジャーナリスト、作家、一部のブルジョワジー、詩人、画家などの語

りて構築された言説を検証し、当時の状況を読み解くことが歴史研究の一部を担っているためである。十九世紀のバレエ史は一次資料分析と表象研究を相互に積み重ねた物語といえよう。

とはいえこれはバレエの歴史に限った話ではない。あらゆる歴史は表象の歴史でもある。ロマンティック・バレエに限定するならば、バレエ史の中で、女性を中心とした表象がどのように精緻化され、再構成されたのかを探ることで、転換期に起こった出来事の意味を明らかにできると同時に、今日まで受け継がれてきたロマンティック・バレエの系譜を理解することができるだろう。

バレエ研究において、歴史研究を主流に、「男性主体の消費社会の中で男性に観られ、消費される客体としての女性ダンサー」という構図が指摘されている。近年では、ジェンダー論の再考、カルチュラル・スタディーズなどの知見によつて様々な研究がおこなわれている。

代表的なバレエ研究の例を挙げれば、アイヴァ・ゲストによる歴史研究がまず重要である。ゲストは『パリのロマンティック・バレエ』の中で、中産階級が台頭しロマン主義的な文化が派生した時期と、ロマンティック・バレエの最初の作品といわれる《ラ・シルフィード》の初演の時期が一致すること、天上界を目指す表現のために使用された爪先立ちで踊る技術、シュル・レ・ポワント（以下ポワント）などがロマン主義の精神性を表したことで、そして、ロマンティック・バレエの地方色の豊かさも、ロマン主義を色濃く表していることなど、歴史研究の成果を明らかにしている。『パリ・オペラ座のバレエ』、及び『第二帝政期のバレエ』などのゲストによる数々の名著の共通点は、バレエ史の詳述に重きを置き、芸術的舞踊観やジェンダーに関する言及は少ないことである。

フランスで活躍したロシア人舞踊批評家であるアンドレ・ルヴァンソンは、著書『マリー・タリオ

「ニー」にてテオフィル・ゴーチエの舞踊評を引用し、当時の舞踊関連の描写を高く評価しているが、ゴーチエが提唱したロマンティック・バレエの理念についての言及は避けている。マリー＝フランソワーズ・クリストゥは、著書『バレエの歴史』で、バレエ史を概観している。ただ、ロマン派の美学について言及がほとんどない。

彼ら以外にも、多くの研究者によってロマンティック・バレエは歴史的視点で論じられている。日本語の文献では、薄井憲二の『バレエ 誕生から現代までの歴史』、鈴木晶の『バレエ誕生』、『オペラ座の迷宮——パリ・オペラ座の三五〇年』などに、バレエ史が詳述されている。

また、メアリアン・エリザベス・スマイスは、批評、逸話、台本、楽譜などの文献資料を横断的に分析し、オペラ研究とバレエ研究を結び付けた。スマイスは、抽象化の進展よりも、ドラマトウルギーと音楽構造の関係に注目し、踊らない場面の減少を、ディヴェルティスマンが物語へ統合されていく過程と論じている。

サラ・コーエンは、アンシャン・レژیームのフランス文化に焦点を当て、身体のプレゼンテーションやキャラクターの表現はフランス貴族文化に顕著なテーマであったことに着目し、バレエ、仮面舞踊、ジェンダー・パフォーマンス、演劇、庭園、室内装飾、そして、アントワーヌ・ワトールの絵画や線画など、多岐にわたるジャンルの複雑な身体表現を分析した。これらの異なる視覚的形態の相互関係を明らかにするとともに、それらを用いて、アンシャン・レژیーム期のフランス文化における芸術的身体の多様で変化に富んだ意義を論じている。

こうした実証的研究やフォルマリズム、美学的研究が中心であった中で、スーザン・レイ・フォス

ターは、人類学や、フーコーなどの知見を用いた社会学的なアプローチから舞踊研究をおこなっている。振付を言語体系として捉え、『振付・物語——バレエにおける物語と欲望の舞台化』では、ロマンティック・バレエを欲望を舞台化する装置として分析している。

リン・ガラフォーラは編著書『シルフ再考——ロマンティック・バレエの新たな視点』において、国際的に活躍する研究者たちによる論文やエッセイを掲載し、舞台舞踊の幅広い文脈におけるロマンティック・バレエの重要性を明らかにしている。同書では、社会史、フェミニズム、精神分析、音楽学までもを対象に、語彙、ジェンダー表現、イコノグラフィなどの観点から、ロマンティック・バレエの国際性、近代的な性格について論じている。

エレヌ・マルキエは、ロマンティック・バレエの歴史・美学研究をおこない、ジェンダー的視点を新聞記事から分析し、批評言説が男性ダンサーの社会的価値低下を促進し、バレエのジェンダー構造を変容させたと指摘している。

こうしたバレエ研究において、バレエの視覚的芸術性についての言及はあるものの、視覚情報を取り入れるために必要な照明技術についての研究は少ない。これは、演劇全般についても同様で、特にフランスにおける照明研究の文献を探するのは困難である。ロマンティック・バレエにおけるガス灯照明は、バレエの芸術性を語る上で欠かすことができない要素であるため、本書ではテレンス・リーの『ガス灯の時代の劇場照明』を参考に当時のテクノロジーや舞台の演出法を検証することで、ロマンティック・バレエが人気を博した理由の一つを明らかにする。

本書の特色は、ロマンティック・バレエを一八三〇—四〇年代の「黄金期」に還元して語るのでは

なく、十九世紀という時代全体の連続性の中で捉え直す点にある。風俗・社会思想・科学技術・観客の嗜好といった同時代の諸要素がバレエ文化をどのように方向づけ、変容させたのかを俯瞰しつつ、そこに映し出されたジェンダー観や女性表象に光を当てること、舞台上の女性像がいかに構築され、どのような意味を帯びていたかを明らかにしていきたい。

ロマンティック・バレエを単なる様式として扱うのではなく、社会的・文化的力学の中に再配置することによって、従来の論じ方では捉えきれなかったバレエ文化の内部構造や矛盾がみえてくるだろう。表象された女性像を手がかりにバレエという芸術を問い直すこと——それが本書が示したい新たな視座であり、十九世紀バレエ研究に新しい輪郭を与える試みでもある。